

**情報通信審議会 情報通信技術分科会 放送システム委員会
衛星放送用受信設備作業班（第 6 回）議事概要（案）**

1 日 時

平成 2 9 年 3 月 3 0 日（水） 1 3 時 3 0 分～1 4 時 3 0 分

2 場 所

総務省 地下 2 階第 1 ～ 3 会議室

3 議 題

- （１）前回議事概要の確認について
- （２）作業班報告（案）等について
- （３）光配信アドホックグループ（仮称）について
- （４）その他

4 出席者（順不同、敬称略）

【構成員】後藤主任（情報通信研究機構）、佐野（テレコムエンジニアリングセンター）、沼尻（電子情報技術産業協会）、加藤（電波技術協会）、中野（電波産業会）、杉本（日本CATV技術協会）、宇佐美（放送サービス高度化推進協会）

【オブザーバ】渡辺（NHKアイテック）

【事務局】小川、糸（情報流通行政局放送技術課）

5 配付資料

資料IF作6-1 衛星放送用受信設備作業班（第 4 回）議事概要（案）

資料IF作6-2 2.5GHz帯アドホックグループ報告概要（案）

資料IF作6-3 今後の進め方について（案）

資料IF作6-4 光配信アドホックグループ（仮称）構成員名簿（案）

参考資料IF作6 衛星放送用受信設備の実測結果（案）（机上配布のみ）

6 議事概要

議事次第に沿って調査検討を行った。議事概要は以下のとおり。

(1) 前回議事概要の確認について

資料 I F 作 6－1 の前回議事概要（案）が承認された。

(2) 作業班報告（案）等について

渡辺オブザーバより参考資料 I F 作 6 に基づき説明があり、主に以下のとおりの質疑が行われた。

- 第 5 回 2.5GHz 帯アドホックの時から変わった箇所はあるか。（後藤主任）
- 資料 22～23 ページに表を追加している。（渡辺オブザーバ）

続いて事務局より資料 I F 作 6－2 に基づき説明があり、主に以下のとおりの質疑が行われた。

- この報告内容は、実測結果の報告（参考資料 I F 作 6）とセットで出回ると考えてよいか。（後藤主任）
- この報告のみである。（事務局）
- この報告案の中では、実測値として得られた最悪値についての記述があるが、どのように測ったかはこの報告案を読むだけでは分からない。実測の内容についてある程度簡単に説明したページを 1 枚付けるか、報告案と実測結果報告は常にセットとして取り扱いしないと、この報告案が注釈だらけになる。（後藤主任）
- 実測結果については各企業の内々の情報であることから、すべからく公開することは差し控えたい。引用もあるので、公開できる情報をかいつまんでサマリーのような形で報告に付けることを考えている。（事務局）
- データまで詳らかにする必要はないが、資料 I F 作 6－2 だけでどういう設計をしたかを理解できるようにしていただければ、これはやった、これはやっていないという注釈を多量に付ける必要はない。（後藤主任）
- アドホックの構成員の方とも相談した上で、後藤主任とも相談させていただきたい。（事務局）
- 資料 6 ページの「今後の取り組みについて」で、手ひねりについては参考資料 I F 作 6 の中にデータがあり、超えてはいけないということがあったからこの報告案に記載がある。後藤主任の発言にもあったように、前の結果とか評価結果の所には手ひねりが駄目であった旨の記載がない。裏付けのデータか、やってみたが駄目であると確認したことが表記されていた方がよい。（宇佐美構成員）
- 了解した。形式についてはアドホックの方で相談する。（事務局）

- 手ひねりの場合に具体的にどういう影響があり、そのため徹底的な対策が必要であるという結論があるとうれしい。（宇佐美構成員）
- 了解した。（事務局）

続いて事務局より資料ⅠＦ作６－３に基づき説明があり、主に以下のとおりの質疑が行われた。

- 資料７ページ記載の「施工後の漏洩確認方法」２項目目は「なんらかの方法で～確認できる場合の」という条件付きだが、これは通常の施工をする電気店や電気工事店等が簡易測定器等を用いて確認することを求めているのか。（宇佐美構成員）
- 微弱なので測定するにしても測定器の性能ぎりぎりかそれを下回るような値に基準案になっている。またオープンエアで背景雑音もかなり存在するため、そもそも技術的に測定可能か否かというのがまずある。測定できなければもう良しとするのか、何らかの方法で測定して良しとするのか。（事務局）
- 推奨というか基準というか、多分周知と施工の徹底をしていくことである程度浸透していくであろうが、そのあと更に測定器を使って測定してというところまで求めた時に実効的にどうかという心配もある。（宇佐美構成員）
- 町の電気屋さんに数十万する機械を買うことを要求するのは無理な話であるし、後は基準の実効性も担保しないといけない。（事務局）
- これについては皆様との議論の中でどういう方法が良いか、ここまでは絶対やらねばならないといった意見が出てくると思う。今のところ、もしやるとすればこういったことを確認する規定を作ればどうかと考えられているという状態ということか。（宇佐美構成員）
- その通り。こういうところまで一応検討のアイテムとして挙げておかねばいけないということである。どういう時のための測定方法で誰がやるのかというところ、例えば町の電気屋さんが施工のために測るのを想定したものを作るのか、あるいは問題が生じた時にどれくらい漏れているか測定するのか。測定方法がないと技術基準への合致を評価出来ないので、何らかの測定方法を検討しておかねばならない。色々な位置づけがあると思うので、その辺も含めて議論させていただきたい。（事務局）
- 議論を行う枠組みとしては、左旋全体の現在の案を適用というのはおそらくこの作業班の中でやっていくと思う。ガイドラインという所までいくと、関係する産業界の方々やプレーヤの方々の色々な意見が必要だと思う。それもこの作業班の中でやるイメージで良いのか。それともまたアドホックを作るイメージなのか。（後藤主任）

- とりあえずは専門的な見識を有する方に提案していただこうと考えている。作業班で議論していただくか、新たにアドホックでやるかは方針として未定である。仮に施工とかにシステムの知見を有する方に参加いただいた方がよいということであれば、メンバーの追加をご提案したい。（事務局）
- 今回の報告書のスコープとしては、ガイドラインの課題の頭出しをするところまでであって、実際ガイドラインをご討議いただくのは報告書が確定してからになる。（事務局）
- 省令が改正されると聞いたが、具体的にはどの省令か。（杉本構成員）
- 現在事務局として想定しているのは、無線設備規則である。電波法第29条に受信設備の漏洩の上限が規定されており、無線設備規則第24条に詳細が落ちている。それに新たに規定を1つ追加し、衛星放送用受信設備にかかる漏洩の上限に関する規定が出来る。規定の上限としては、技術的条件としてお示しいただく基準となる値、さらに測定条件としてどういうものを測定するべきか、どういう環境で行うべきかを書くことを想定している。報告書でこうすべきであるという内容で示していただき、それを元に省令として提案し、それを電波管理審議会で議論するという流れとなっている。（事務局）
- 対象は左旋だけか。（杉本構成員）
- 今回議論していただいたスコープで規定していくことになる。今回左旋対全体に適用可能かという議論になっているが、その結論を踏まえてその帯域で規定する。（事務局）

（３）光配信アドホックグループ（仮称）について

事務局より資料ⅠＦ作６－４に基づき説明があり、第１回会合は４月中を目指している旨連絡があった。

（４）その他

- ＪＥＩＴＡでの取り組み状況を報告する。現在ＪＥＩＴＡはＳＨマークを設定しており、その中に規定されている文言の中には被漏洩、与える部分受ける部分についての文言は一切無い。今日の作業班を踏まえてしきい値を理解するとすれば、タイミング的にこれが公表された状況があるので動きがとれるとは以前から想定していた。実は数ヶ月前から検討段階に入っていた。しきい値をそのまま引用する訳にはいけないので、製品の品質を担保する上でのマージンを考えながらしきい値を決めていく作業に入っている。細かい状況というのはまだこれから数ヶ月かかると思うが、出来るだけ早く今回の作業班で出た情報を元にして決めていきたい。色々な案

があるのでここでは詳細を述べないが、今付いているＳＨマークでは今回のしきい値をマークの中に統合してしまうと、古いものと新しいものの判別が出来なくなる状況がある。マークを何らかの形で変えなければいけないかもしれないし、また別にマークを作って共存させるための何かを表示しなければならない状況があると思っている。それからＤＨマークのものが全て規格に入っていないかの確認はまだ取れていない。今の時点でＤＨマークのものは販売されている状況があるので、そちらの方にも範囲を広げてフォローできるような体制を取りたいと考えている。いずれにしても、今回の作業班で出た数値や測定方法等を加味しながら、また皆様に相談しなければならないと思うが、ＪＥＩＴＡの方でも提案を先に出来るような環境作りをしていきたいと考えている。（沼尻構成員）

- 引き続き情報提供をお願いしたい。（後藤主任）
- 仮に技術基準が出来たとして、流通の経路とか製造の期間に対するマージンがあると思うが、その辺の一定の猶予は必要だとお考えか。（事務局）
- どのくらいかは別として、ゼロではないと考えている。適正な値がどれくらいかについては、今ここではまだ申し上げられない。測定方法と規格値に対するマージンが一番重要であって、今回のアドホックも最初電力換算でやっていたものを電界強度に置き換えたり、帯域を操作したりしているので、実際のＪＥＩＴＡにかかわる企業やＳＨ／ＤＨマークを申請するメーカーに分かりやすくしてあげないといけない。測定環境もあまり難しい環境だとお金がかかるので出来ない。そういったことについては、また相談させていただく中で、ＪＥＩＴＡの方でも動いていきたい。（沼尻構成員）
- そういった意味では後藤主任からもご指摘があったように、産業界からのインプットもこの場に入れていただき、議論しながら作っていきたい。

この後事務局より、次回の作業班の開催については4月中の開催を目指している旨連絡があった。また、詳細については後日改めて連絡する旨連絡があった。